Sak-1

資料名　昭和八年六月編纂　敷香町勢要覽

出所　敷香町役場

作成年　19330710

寄贈者

受入　調査部

注記　住民について「オロッコ」「ギリヤーク」「キーリン」「サンダ」「ヤクーツ」にも言及

2 11
131

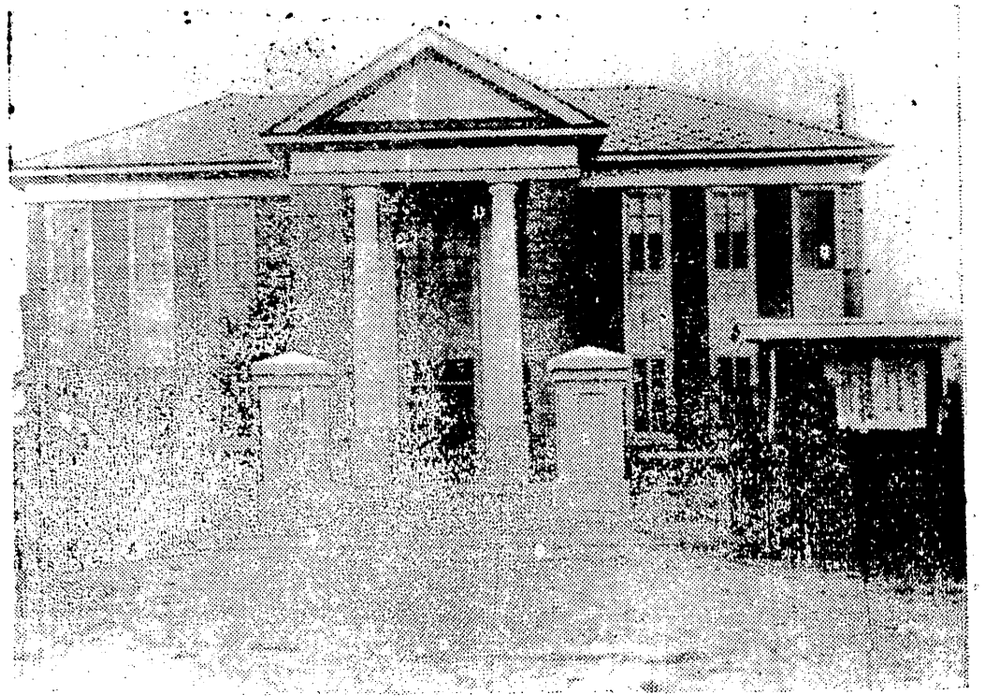
昭和八年六月編纂

敷香町勢要覽

敷香町役場

小樽高等商業學校
調査部

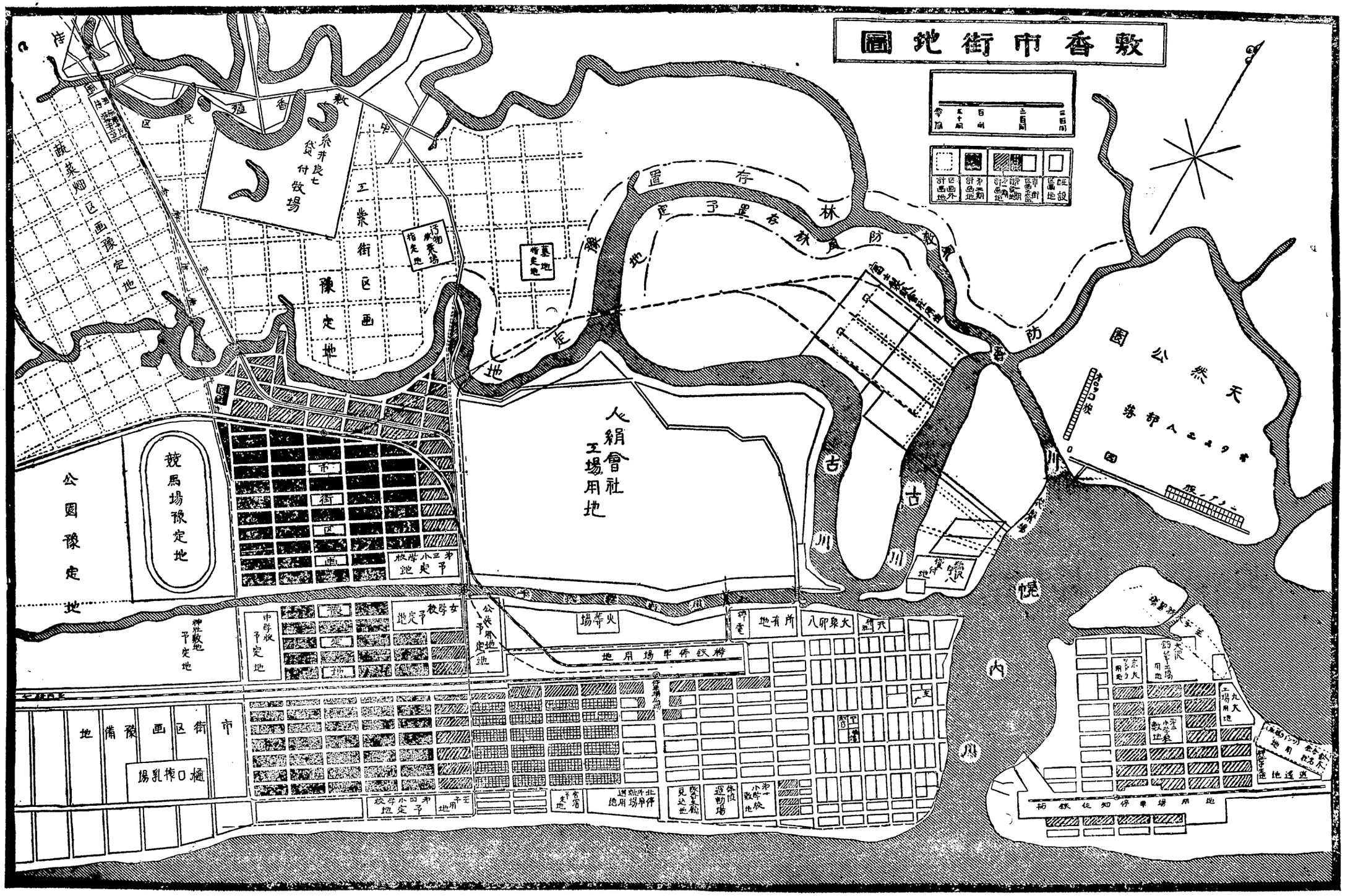
門部 2
部番號 11
册 131



敷香町役場

町長鈴木朝次郎

敷香市街地圖


敷香殖民地
蔬菜畑区画豫定地
糸井良七貸付牧場
工業街区画豫定地
墓地指定地
行刑場指定地
置存林
豫定地
防風林
敷香川
古川
幌内川
天然公園
絹會社工場用地
公園豫定地
競馬場豫定地
市街区画
小学校予定地
女学校予定地
中学校予定地
神社敷地予定地
公共用地予定地
火葬場
郵便局
所有地
八幡宮
大泉
樺太庁
樺太鉄道停車場用地
市街区画豫備地
樽口搾乳場
校学小四等予定地
北海道庁停車場用地
食堂
見込地
体育運動場
小学校
丸大
工場用地
樺太鉄道停車場用地

目次

巻頭　敷香市街地圖（其他寫眞數葉挿入）

沿革……1
明治八年以前、露領時代、保護河川の起源、再び邦領に歸して、漁場の變遷、初代の守備隊長初代の民政署長、最初の越年者、料理店と旅舘の元祖、幌内川溯航鼻祖、ツンドラ工業の興廢

位置と地勢……5

地質と土性……6

町沿一覽……6
戸口累年比較

都市計劃……8
市街宅地、工場地帶の豫定、蔬菜畑地帶、施設の概要

町財政……12
歳入、歳出

氣候……14

産業……15
林業、農業、畜産、鑛業、水産、商工業

教育……22
小學校、青年訓練所、青年團、帝國在鄕軍人會分會

交　通……23
陸上交通、海上交通、幌内の水利、管内の道路、管内里程表
エキゾチックシクカ……27
土人部落、國境碑、白鯨と鮭鱒、土人の住居、倉庫と獨木舟、土人の婚姻と出産、死亡と其後
土人の神様、海豹島と夏の海

沿革

△明治八年以前

古い昔の狀態については正確なる文獻もなく、亦た探れべき人もないのであるが、明治八年前、即ち邦領時代には此地方に日本人としての定住者は無かつたものゝ樣である。たゞ荒海を恐れぬ北海漁夫の間には幌内川の鮭鱒の漁業價値が知られて居り、宗谷の濃霧とオホツクの荒波を冒して充分漁利を博すると同時に、舊土人との間にも毛皮の取引きが行はれてゐた事は現存せる人々にも立證されるが、當時此の地方へまでも押し渡つて來た生活戰線の勇士達も此所に住居を有ち越年した者はなく、當時の定住者はアイヌと、夫れ以外の土人達であつた事はチヨロナイ川の川畔に無數に殘された半穴居生活の遺跡によつても窺はれる。

△露領時代

明治八年露國政府の半恐喝交渉により涙を呑んで放棄した後も猶ほ且つ幌内川の漁業價値を忘れ兼ねた北海漁夫の群は、依然として渡航することを止めず、邦領當時と同樣の漁業を繼續したもので彼等にとつては收獲稅を會所に納めるのが露國政府を監督官に納めるやうに變つただけの相違であつたらしく當時の敷香の狀況は其後の各方面から蒐められた資料に基いて考察するに本國から派遣された漁業監督所の外に郵便局、カヂンナイフード(國營物品配給所)等の官造物の外に狩獵を生業に營む民家も十二三戸は定住してゐた模樣で其當時の建造で現存してゐるのに郵便局(山中商會事務所)漁業監督所(舊官行事務所の二階建)等である。

△保護河川の起源

斯くて明治十七八年の頃までは大した變化もなく至極平和に、産卵の爲め溯上する鮭鱒を河中で漁獲して來たものであるが其頃になつて漁業監督官は河中にて漁獲する事は、魚族の蕃殖上甚だ有害であると認めて之を禁止し河口を中心に勝手に漁區を選定し漁獲せしめた、これ

が今日の保護河川の濫觴である當時漁業に從事してゐた人々の中今日尙ほ健全の人々は敷香で永野彌平、多來加の木田、手牛の有田の諸氏がある。後幾何もなく狡猾なる、クロモレンコ(監督官)は日本人漁夫から收獲稅の外に尙ほ、余分の搾取をなすべく奸計をめぐらし、沿岸漁獲も魚族蕃殖に有害だとあつて一時漁獲を禁止して置き乍ら河口を中心に兩側四ヶ所の漁區を可成りな高價で函館の相原氏に貸與したなどのエピソートも殘されてゐる

△再び邦領に歸して

過ぐる日露の役に於ける皇軍の大捷は、樺太をして再び邦領に歸せしめた。占領後の敷香に於ける最初の入地者(軍人以外の)にして且つ最初の定住者の一人である齋藤三代吉氏は明治三十九年五月函館の尾形商店員としてサンパ船に漁夫十人を乘せて漁業着手準備のため敷香に上陸した時は尙ほ露人が百七十人住んでゐたが、日本人は元泊以北には其の片影だにも見ることが出來なかつた。占領後既に一ヶ年近くを經過してゐたに拘らず露人は戸毎に白旗を揭げて降服の意を表して居り敷香の入口(內路方面よりの)には

日本政府ハ樺太全島ヲ占領ス
日本政府ノ命ニ依リ之ヲ告示ス
北遣艦隊分遣隊司令
海軍少將　中尾　勇

といふ告示が嚴然と標札されてゐた。

當時露人は敷香をチフネフスキーと呼び日本人は靜河と書いてシスカと呼んで居たと云ふ。

△漁場の變遷

日本軍は樺太を占領すると同時に大泊に軍政署を置いた事は周知の事實だが同年十月軍政署では漁區の競爭入札を行つた。其際無論敷香のそれも行はれ

現在の廿三號は　函館の尾形　五、六〇〇圓
同　廿四號は　散江の高谷　八、六〇〇圓
同　廿二號は　函館の米林　五、七八〇圓

を以て落札し是を尾形氏が全部買收して齋藤三代吉氏が經營の衝に當つた尙ほ、廿一號は明治四十四年に至り開放され種田富太郎氏が落札したものを尾形氏が八万圓を以て買收した。

△初代の守備隊長

明治三十九年六月、海軍と交替して陸軍が內路に守備隊を置く事となり現在の福田商店となつてゐるのが其兵舍であつた。初代の守備隊長は當時陸軍大尉の市毛子之助氏で現在は西灣內遠淵の郵便局長をして居らるゝ筈である。

△初代の民政署長

後ち幾何もなく民政署が置かれた。其當時の敷香管內は近幌以北で現在の元泊管內と敷香管內とを合せただけあつた、そして民政署の所在地は守備隊と同樣內路に置かれることに決定してゐたのであるが同地に於ける立派な建物は悉く陸軍に占領し盡されてゐるのを見て憤慨した剛腹の初代民政署長成富道正氏は、憤然敷香に來り露領時代の郵便局を廳舍に充てた。此の廳舍は後ち近幌以北の官民合同の大懇親會場ともなりクラブともなり、幾變遷の後、現在では山中商會事務所として使用されてゐる。

斯くして敷香支廳の前身たる民政署を內路より敷香に移した成富氏は當時廿六歲の年少ではあつたが敷香町の將來あることに着眼し爾後八年間各種の產業開發に力を傾注した事は勿論であるが市街計劃を行ふにあたつても殆んど現在の市街以上のものを豫想してゐたもの〻如く下水溝、道路等の諸施設に對して頗る文化的であつた、それは火葬場が現在の位置に選定し廿八年後の今日に至り漸く移轉する事によつても其の卓見振りが窺知できやう

△最めの越年者

明治三十九年の冬から四十年の春にかけて越年した人々は即ち敷香最初の定住者は官廳では成富所長以下七名民間では上田商店三名、尾形漁場二名、米林の漁夫一名で右の內吾々が今日面接し得るのは當時尾形漁場の雇人で冬期間役所の用人とし越年した泊岸櫻家の主人小笠原喜助齋藤三代吉また當時米林の漁夫であつた奧谷(昭和

六年春散江で死去）である。

△料理店と旅館の元祖

明治四十九年になつて三浦良吉、山十の主人飛澤良太福田定吉、吉岡信平の諸氏が移住して來た。そして三浦良吉氏が露國人の馬小屋を改造して三浦家の看板をかゝげ女と酒と提供する商賣を初めたこれが敷香に於ける料理屋の元祖で旅館の元祖は其後敷香館飯島キヨさんが經營した事に初まる。

△幌内川遡航鼻祖

河川の獨占が何うの斯うのと木材業者と航行業者間に面倒な問題を惹き起す幌内川を日本人で初めて國境附近まで航行したのは時の民政署長成富氏の一行である。明治四十年國境確定委員長大島陸軍大佐（現大將）畑參謀大尉（現關東軍司令官）一行から物資が缺乏したからこれが補給方に應援を賴むとの使者が民政署に到着したので幌内川は果して何の地點まで舟行可能であるか探險旁々成富氏自ら屈强の若者十名を引き具し物資を舟に積み込み溯航した處、ムイカ附近までは何等の支障もなかつたが同所に六七丁に亘る流れ木の木詰りがあつて舟行を阻止されたが後ち弘前工兵隊の手により爆破され國境附近まで水路を開いた。

△ツンドラ工業の興廢

明治四十三年頃に至つて大阪の藤本氏がツンドラの利用價値について熱心な研究を繼續したが此の人は惜しい事に四十五年の幌内川口遭難で死去した、其の頃京都の大谷尊由師一派と青森の北山氏一派とが合同してツンドラ板紙株式會社を組織して北山派の鈴木源司氏を工場長として赴任せしめ大正元年に至り工場が完成した。現在の山中木工場の建物がそれであるが、大正三年ドライヤーの試運轉中機關が破裂して非常な損害を蒙り再起不能に陷つたので操業を休止してゐる中に大正七八年の鐵の暴騰時代に際會したので機械類を解体して賣り工場を解散し建物は先年狂人となり小樽で客死した佐藤勝治が千圓位で買ひ利鞘をとつて之を福田に賣り更に山中商會に移つたものであつた。又其頃神戸の曲辰鈴木商店でもツ

ンドラの利用價値に着眼して用向ひに工場を建設し小川德平氏を經營の任に當たらしめ、別に加賀谷農學士をして專門的に研究を繼續せしめたが、此所では直ちに製紙にするといふのではなく壓搾機にかけて壓搾したものを輸送する程度のものであつたが震災後の財界パニックに禍され本家本元の鈴木が倒れたゝめ自然消滅の形となり幌内川右岸の古びた工場が高く今は在りし日を物語つてゐるに過ぎない。

位置と地勢

將來に向つて多大の期待と嘱望とをかけられてゐる新興の敷香町は本島東海岸に於ける最北端に位する都市であると同時に東邦北門の國際都市でゞもある。西は内路村及び中央脊梁山脈を境界に名好村と界し南は多來加灣に直面し東は散江村、北は北緯五十度の國境線を距てソヴエト聯邦ロシアに對してゐる。此の面積は北緯四十九度十四分に立脚する敷香町を基點とし國境半田に至る南北約廿五里東散江村との境界より西内、路村及び名好村と境界線平均約廿一里廣袤實に五百廿五方里に達してゐる。

南、多來加灣に面する方面は島内一の大平原地帶であつて殊に内路敷香間の海濱は干潮時に於ては絶好の自轉車路となり前年巡視の爲め來敷された松田前拓相より東洋一の舗裝道路なりとの折紙をつけられ居る程で幌内川を渡り散江村界に至る海濱も亦た之れに優るとも劣る事なき絶好の自動車道路である。幌内川右岸、國道上敷香街道を約六里北上し上敷香に至る迄は海岸を延長したるの觀ある平坦地にして之より次第に山岳地帶となり内地市場に高唱されつゝある敷香材の生産地である。然し乍ら敷香川及び之れが支流なる駒問川、幌内川の支流たるダリー川、保惠川、氣屯川、古屯川等の流域には、相當廣漠たる地味頗る肥沃なる平野を有し、隨所に絶好の農耕地が開拓せられつゝある。

本町の地勢を概別すれば、北部並に西部の山岳地帶と

東南部の低濕地帶とに大別する事ができる。源を遠く露領に發し北緯五十度にして邦領に入り本町の中央部を長流すること五十里にして多來加灣に注ぐ本島一の大河幌内川と、振戸山麓に源を發して多來加湖に注ぐ振戸川との兩流域には延長にして約廿五里、幅員にして五里乃至八里にも及ぶ所謂、大ツンドラ地帶が存在し頗る雄大なる觀を呈してゐる。振戸、毛賣、留久玉等の諸川の注入する多來加湖は、且つて全般に亘つて實測を試みられたる事なきも其廣大なる事に於ては我が國第三位の稱あり此の湖は尺餘の鮒を產する事に於て、白鳥、鴨、しぎ等の狩獵地たる事に於ても亦知られてゐる。

地質と土性

東部山岳地帶は古生層を主とし第三期層が之れに次いでゐる。而してこの古生層は東北露領に端を發し、廣汎なる地域をしめ國境附近の高地に到れば未だ調査が充分に届いてゐない樣である。上層腐植質土に被はるゝ土壤は比較的河川流域に多く見受けられ何れも農耕に適するものである。高層濕原は所謂ツンドラ地帶であつて植物の生育には不適なりとされてゐる。中部低濕地帶は大部分ツンドラ地帶に屬するもので幾分古生層、第三紀層の分布を見るも一般的には植物の生育には不適地とされてゐる。西部山岳地帶は殆んど古生層に屬し、之れに略平行して第三紀層がある此の地層内には石炭の分布頗る多く其埋藏量實に十億噸と稱せられ是れに次ぎ第四紀層がある、即ち幌内西流域の沃野で漸次開發の機運に惠まれつゝある。

町沿一覽

大正十一年四月一日　樺太町村制施行と共に本町の前身は敷香村に編入され同時に村上榮之進氏村長に任命さる。同年四月十日　選任せられたる評議員左の如し。

太田弘三郎(評議長)、秋元卓一、三島松次郎、田栗德太郎、元山多一、石橋明、田森利三郎、吉岡信平

同年同月十五日　左の三氏評議員に任命さる。

松田兼吉、片山小彌太、三浦良吉

大正十三年二月十二日　評議員任命

秋野豊治

大正十三年八月一日　戸籍法及徵兵令施行さる

同十四年四月十日　評議員改任さる

秋元卓一(評議長)　却野正義、片山小彌太、伴寅市、森孫一、田栗德太郎、三島松次郎、門脇吉三、鈴木万藏、吉岡信平、秋野豊治

同年十月一日　村上村長轉任に付き同日元山多一氏の任命を見る。

昭和三年四月　評議員の任期滿了により改選の結果左の通り任命を見る。

相澤龜吉(評議長)　小田良吉、田森利三郎、福田定吉、三浦良吉、富谷亮三、仲政勝、村山勇吉、大門藤太郎、大和喜一郎、黑澤清吉、田栗德太郎、鈴木万藏、吉岡信平、秋野豊治

同年同月　元山村長依願免となる。

同年五月三十日　小野生駒氏村長に任命さる。

昭和四年七月一日　樺太改正町村制施行と共に改選せられた町會議員左の如し。

秋野豊治、相澤龜吉、田栗德太郎、黑澤清吉、長谷部敬一、谷畑圀光、大和喜一郎、仲屋常吉、作佐部蔚、三浦良吉、田森利三郎、大和榮三、白方幸市、若林清次郎、淺野忠太郎、山口寅造、土岐勘四郎、鈴木万藏

昭和五年七月一日　敷香町と改稱さる

同年九月十六日　小野町長久春内村長に轉任と共に中山泰氏町長に任命さる。

昭和六年六月一日　中山泰氏知床村長に轉じ、鈴木朝次郎氏町長に任命さる。

昭和六年十月　町會議員補欠選擧の結果は

折戸惣市、高野雅夫、五十嵐勇、會津悅郎、柏木藤吉、山口吉藏、河野熊一郎、今井佐吉、小田良吉當選す。

現在の敷香町會議員は

山口寅造、柏木藤吉、會津悅郎、折戸惣市、今井佐吉、土岐勘四郎、若林清次郎、秋野豊治、白方幸一、田森利三郎、高野雅夫、鈴木万藏、五十嵐勇、仲屋常吉、長谷部敬一、十五名　三名欠員

併し乍ら本年九月町會議員改選となれば定員二十四名に增加せらる。また近く本町が一級に昇格した場合は町長の外に助役を置く事となる。

町公職（昭和八年六月末現在）

區分	町長	收入役	書記	書記補	技手
俸給	一	一	八	六	二

區分	町會議員	區長代理	學務委員	土木委員	警防委員	衛生委員	財務委員	市街計畫委員	産業委員
名譽	一五	一五	一三	一五	七	六	六	七	一〇	一五

戸口累年比較

	戸數	人口
昭和五年末	二、五〇五	一二、六五五
昭和六年末	二、八〇〇	一四、八七三
昭和七年末	三、〇六二	一六、〇九二

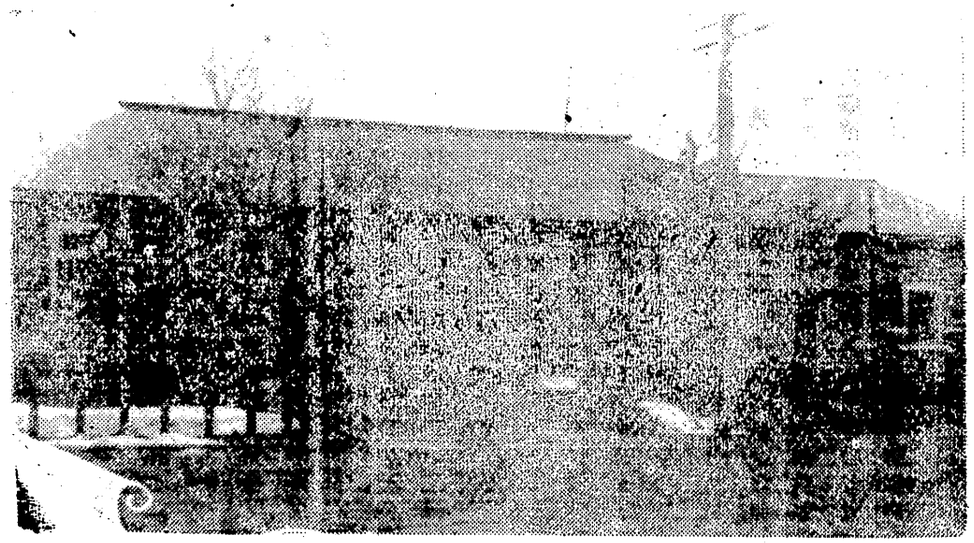
都市計畫

無限に包藏せられたる各種の天然資源開發と與へられたる地の利により各種近代的化學工業の根據地となるべき敷香は近き將來に於て、現在に於ても異常なる膨脹伸展しつゝあるに鑑み將來の國際都市として体面上恥かしからざる體裁と共に此處に住む市民の生活を愉快ならしめんが爲めに昭和四年秋、斯界の權威者北大教授倉塚博士を聘し實地に就いて田園都市計劃を樹立したのであるがその後の情勢が遺憾乍ら倉塚案の田園都市に背きつゝある傾向に鑑み現職香支廳長河井智茂氏は今春人絹會社操業による工業都市のプランを樹てた。即ち次の如き遠大なものである。（卷頭に地圖挿入）

◇占領當時からその儘の建築

敷香支廳

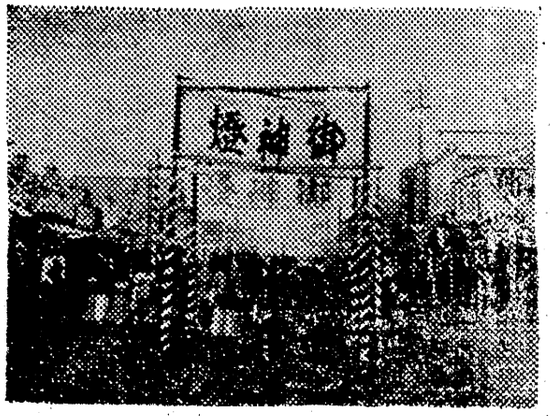
◇今や移轉新築を叫ばれつゝあり……



市街宅地

（イ）敷　香（第一期計畫區域）

本年人絹着工のあかつきは現在飽和狀態の市街は勢ひ上敷香道路迄膨脹すべきものと豫想せられ、同時に人絹工場南方上敷香道路沿線も亦市街地を形成すべきは明かなり、因つて此區域を第一期市街區劃區域となしたり。此區劃豫定數約八百區劃とす。



敷香八月十日祭典

（ロ）敷　香（第二期計畫區域）

前項計畫區域發展の狀勢に從ひ緩急に應じ區劃開放すべき地帶にして一方的膨脹の他餘地なき本市街將來の爲絶對的個人に占有せらるゝ事なき樣存置すべきものとす此の區域に於ける區劃豫定數は千二百區劃とす。

（ハ）敷　香（豫備地）　將來のため本地域を存置するは必要不可缺の方策と信ずるものなり。

（ニ）佐　知…母町發展に伴ひ必然的に發達すべきは明かなる所にして從來同樣工場地帶として市街形成せしむべきものと思料す、然して本地域に區劃すべき宅地は約三百五十區劃の見込——

工場地帶の豫定

敷香町將來を豫想し適當の地域に工場地帶を設くるは都市整理上必要なるものにして現在の佐知の外交通水利の點より敷香川、古川中間の地帶を選定せり。本地域は現在ツンドラ地帶にして利用價値少きも市街豫定適地に乏しき關係上多少の改良費を利用者に負擔せしむるは止むを得ざるものと思料す。

蔬菜畑地帶

市街の發展に伴ひ蔬菜、肉、卵等は附近に廣大なる農

村なき敷香町には到底需要を充たし難きは明かなるを以て上敷香道路を挾み百區劃以上一區劃(三千坪)の區畫を設け專ら市街を背景とする蔬菜、養豚、養鶏業者を收容し農畜産品の需給を補はしめんとするものなり本地域はツンドラ地帶を含むも改良により利用し得べしと認めらる。

施設の概要

△敷香神社敷地

現在の神社位置は市街に近接し且つ奥行きに乏しく然も擴張の餘地なく森嚴を保ち難きを以て之を郊外公園に奉遷するを適當と信ず。

△公園

(イ) 郊外公園…チョロナイ川上流天然林を包括しチョロナイ川清流を挾む約廿万坪の地を畫し將來神社を奉遷する外道路を開鑿し諸般の公園施設をなすものとす

(ロ) 小公園…現在の体協グランドに對し周圍を植樹しグランドの餘地には兒童用遊具を備へベンチを設くる等市街居住者の散策に便ならしむ。

(ハ) 天然公園…カタスは土人保護區域として適當なるのみならず地域一帶には高山植物に富み天然公園としての要素充分なるを以て永久に保存せんとするものなり。

△停車場

停車場の位置は西一條西二條間中通の延長線(チョロナイ川寄)にまで移動せしめ其の跡に市街宅地百二十區畫を增設せんとす。

△前廣場並道路

驛前廣場は從來間口八十四間奥行七十三間なりしも店舗繁榮策上之を間口六十間に縮少せり、然して本地全體を道路並に地固めすることは徐々に之を行ふことゝし當分通行に差支へなき程度の道路を設け他の部分は素地の儘植樹し風致を添へ又停車場に通ずる二十間道路は小公園と連絡を保たしめ街路樹を植へる等綠化するときは一段と市街美を增すものと思料す。

△鐵道線路用地

從來の豫定線の外內川方面との連絡上舊人絹用地古川

附近に沿ひ迂回する計畫線あるを以て之が用地を存置せり。

△競馬場

現在の位置を廢し、チョロナイ川、古川中間元人絹用地南方接續の區域に於て一六〇〇メートル馬場を設け本格的の競馬場たらしめるものとす。

△官公用地

(イ) 支廳…行政上の利便より從來計畫の位置を適當と認む。

(ロ) 裁判所用地…北斗軌道用地南方接續地に於て之を豫定す

(ハ) 官公舍用地…從來の官公舍用地の外時宜に應じ區畫地內に於て選定するものとす。

(ニ) 小學校用地…人口五万を目標として考察するときは就學兒童は優に六千人に及ぶべく之を三校に收容するを要すは亦明かなり、因つて將來を豫想し適宜按配豫定せり。

(ホ) 中學校女學校用地…チョロナイ河畔第二期市街地帶に於て豫定す。

(ヘ) 隔離病舍用地…競馬場國道間の地を選定せり、町立病院實現の際は院內に設置するものとす。

(ト) 射撃場用地…チョロナイ川上流公園接續地を適當と認む。

(チ) 墓地火葬場汚物投棄場用地…既に中敷香道路沿ひに於て決定しあるも工場地域の計畫に準じ位置整理をなすものとす。

(リ) 公共豫定地…現在競馬場及び樺鐵用地中間の空地約一万三千坪の箇所にして將來市街の發展に對する諸施設豫定地たらしむるものとす。

(ヌ) 防風林地帶…敷香川、古川堤防地帶を防風森地帶として存置せんとす。

△佐知

一、神社敷地…現在ツンドラ工場、拓鐵線路間の地を之に充てむとす、然して現在の天然木を利用し市民逍遙地たらしむるものとす。

二、小公園…前項神社用地內を利用するものとす。

町財政

（豫算）

區分	歳入			歳出		
	經常部	臨時部	計	經常部	臨時部	計
昭和六年度	一八二、四四三	一〇一、六三三	一八二、四四三	八〇、八一〇	一〇一、六三三	一八二、四四三
昭和七年度	一五五、〇八五	五五、八六三	一五五、〇八五	九九、二二二	五五、八六三	一五五、〇八五
昭和八年度	一五八、九〇五	九八、〇六一	一五八、九〇五	六〇、八四四	一五八、九〇五	

尙八年度豫算內譯を示せば次の如し

△歳入

科目	
財産收入	一、五〇二
使用料手數料	二、六七八
交付金	三、六二四
國庫補助金	二、八三〇
寄附金	一、二五〇
繰越金	一、八五〇
雜收入	七、八五〇
其ノ他	一〇、〇〇〇
計	三一、五八四
國稅附加稅	八、三二五
特別稅戶別割	三三、〇〇〇
同 建物割	一一、九〇〇
同 土地割	六七
同 營業稅	二、二〇〇

同 雜種稅	七一、二六九
同 所得割	五六〇
計	一二七、三二一
合計	一五八、九〇五
町村稅平均 一戶當額	四三
戶別割平均 一戶當額	一五

△歳出（經常部）

科目	
神社費	六二
會議費	二、〇六五
役場費	三五、九七〇
土木費	三、三五〇
教育費	二四、八三九
衞生費	六、三七九
勸業費	二、二三〇
警備費	一二、〇四六
財産費	一、七三〇
其ノ他	九、三九〇
合計	九八、〇六一

（臨時部）

科目	
土木費	三、五二〇
教育費	二三、九六三
衞生費	六、五四〇
警備費	七五〇
補助費	三、三七二
借入金費	九、二七九
選擧費	二、〇二〇
住宅費	一〇、〇〇〇
其ノ他	一、四〇〇
合計	六〇、八四四

備考…歳入出表共に圓を以て單位とし未滿は四捨五入す

氣候

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
午前十時平均氣溫	(一)一五、八	(一)一四、四	(一)八、〇	〇、〇	四、七	一、〇〇	二、七	一五、七	一三、八	七、九	(一)一、八	(一)一二、六
最高平均氣溫	(一)一〇、六	(一)九、四	(一)四、五	二、三	六、七	一三、三	一三、二	一七、六	一六、六	一〇、四	一、〇	(一)八、四
最高氣溫	(一)〇、五	(一)一、三	一、八	九、七	一四、〇	一九、九	一七、七	二六、三	二三、〇	一六、六	九、五	一〇〇
最低平均氣溫	(一)二三、四	(一)二二、六	(一)一四、六	(一)五、七	〇、三	五、七	八、六	一一、六	七、七	二、二	(一)六、六	(一)一六、五
最低氣溫	(一)三三、五	(一)三〇、〇	(一)二三、五	(一)一五、九	(一)二、七	(一)一、〇	四、五	七、三	一、五	(一)二、八	(一)一八、四	(一)二三、七
晴天日數	九	一三	三	三	一	一	一	二	二	四	二	三
降水量	耗二五、〇	四〇、四	三〇、五	四〇、三	八六、六	五六、五	五六、三	二五六、八	二四、三	九二、三	五二、九	三五、七
最多風向	北西	北々西	北々西	南	南東	南々東	南々東	南	南東	北々西	北々西	北々西

降霜　終日四月二十七日　初日九月二十三日　雪降　終日五月十二日　初日十一月一日

備考…氣溫は攝氏の度　(一)印は氷點下　降水量は耗

産業

△林業

本邦に於ける林森王國の地位を確保する本島森林蓄積量も逐年の伐採と山火の被害とにより漸減し、現在林業家に依つて慣用されつゝある搬出設備方法を基礎とする採算價値から見る針葉樹蓄積量は今や四億万石の悲觀説さへ唱へられ初めた程で多く見積るも六億万石を出づることは出來まいと見られてゐる折柄、更に南部地方に於いては既に森林を伐採したるの感あり。殘されたるものゝ大部分は、北方に偏在し敷香林務署管内に屬するものは、其の三分の一乃至四割二分に該當する二億一千万石を算し、内本町管内に屬するものは其の大部である。

太丸たし積場土
(敷香奥地の造材現場)

千古よりの大原始林
(池田澤方面)

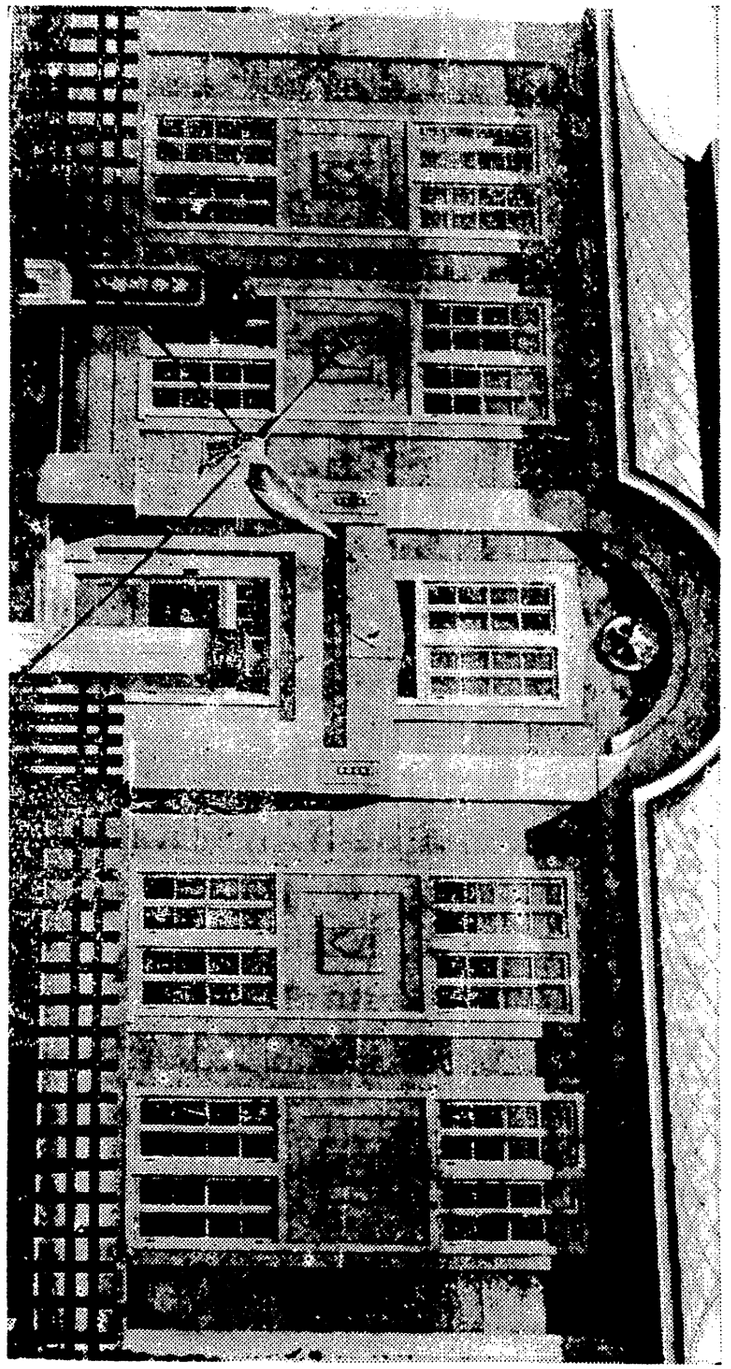
一億六千八百石とほかに濶葉樹の殘一千万石の森林資源が未開發のまゝに殘されてゐる。斯うした環境に成育を遂げ更に躍進の氣

——幌内川口に碇泊の木材積取船——

運に專まれつゝある敷香は漁業に依つて生誕を見たとは云ひ大を爲し爲さんとする榮養素は勿論森林であり木材である。

本年本町の豫算に就いて見るも、歳入總豫算額（昭和八年度當初豫算）十五万八千九百圓五圓中、木材流送に依る流木税五万四千五百圓、官行流木交付金三千三百圓、合計五万七千八百圓を占めて居り之れを戸別割の三万三千圓、遊興税の六千圓、建物割の一万一千九百圓等と比較しても如何に木材關係に依り惠まれてゐるかを想像する事が出來る。然かも他の稅は徵收者に對し直接各種の施設費、管理費其の他種々の名目につて還元されるに反し依獨り木材のみは如何なる意味合に於いても材業者へは還元されぬ。

更に木材を原料とする近代化學工業とも云ふべき資本金一千万圓の日本人絹パルプ株式會社工場が本町に設置れ着々建設工事を進めさつゝあり、着業の曉は單り木材業界に活氣を呈するばかりでなく、町財政の上にも多大なる收益がある事は確實でである。



敷香の一隅を圍繞する市街地と警察署

△農　業

本町に於ける氣候風土は世上の想像と反し、夏期間は比較的氣溫上昇し、海岸風の影響せざる幌内川西流域地方は本島中稀にに見る農耕適地にして、曾つて前喜多長官が奥地方面を視察し幌内川を下降せる時、餘りにも膨大なる農耕地の存在に對して樺太廳の從來取り來つた農殖民政策の南部偏重主義を變更せねばならぬと迄感歎せしめた、肥沃なる農耕地がある。

◇上敷香で收穫した農作物◇

中敷香、駒間、上敷香、氣屯の各農耕地は右の代表的なるものにして其の成績は、麥類、蕎麥、青豌豆等を初め馬鈴薯、ニンジン、大根、其の他蔬菜類に於ては生育收量は殊に良好である。

なほ亞麻、薄荷等の特用作物も品質良好なるのみならず從來不安とされてゐた大豆、菜豆類に於ても近來完全に結實するに至つた。其他水稻の研究もぼつ〳〵行はれその成績割合に良好なれば近き將來に於ては或は實現の可能性あるものと謂はれてゐる。

イ、農業者戸口表　昭和七年末

	戸數	人口
專業	二、四九七	三九五
兼業	一七〇	八八四
計	六六七	二七九

ロ、耕地反別　昭和七年末

	反別（ヘクタール）
前表に依る農業者戸數	八一七、五五
	六六七

一戸當　（クダール一、二）

八、農業者收容餘地調

昭和七年末

駒問	一五六	五九	三四	六三	九七		
大木	一七〇	四八	八〇	四六	一二六		
初問	二〇二	二三	七三	一〇六	一七四		
氣屯	二二七	一〇一	二五	一〇一	一二六		
上敷香	二二五	一八〇	一三	三二	四五		
中敷香	一六二	一三五	一一	一六	二七		

昭和八年中に於ける敷香支廳の當町管内土地區劃計劃に依れば

場所	區劃見込數	種別
敷香	一、三六八	市街宅地
佐知	四七三	同
多來加	一五	部落宅地
上敷香	七五	同
中敷香	四四	殖民地
上敷香	七四	同
保惠	七八	同
氣屯	六一	殖民地
幌内川流域	五〇〇	同
大木	二四	同
初問	一一九	同

△畜産

管内到る處牧畜適地多く野草繁茂せるのみならず、飼食作物たる燕麥、牧草の生育良好にして極めて牧畜に適してゐるが從來企業者少く、此の方面が特に閑却されてゐたが近時著しく農業の發展と並行して、漸次斯業が盛んになりつゝある。

尙最近の著しき傾向は農家に於て鷄、狐、兎等の小家畜の飼養事業が勃興し、優良毛皮産出と云ふ極めて有意義なる出發をなしつゝある。

馴鹿はトングース、オロッコ土人の所有物を合して約八百頭を算し、年百頭餘の生産を見つゝある。之が使用目的は冬期の交通不便なる事業地への物資輸送の爲使用されつゝあつたが、昭和五年の夏期に東樺拓鐵のツンドラ地帶測量に際し牛馬の交通し得ざる地帶をも自由自在

に、貨物を運搬交通して其實用的なる事が、今日漸く判明するに至つたので之が飼養は特に重要視せられてゐる

左に昭和七年末の家畜數を示せば

牛	馬	豚	鷄	兎	狐	馴鹿
九二	四三三	三九	三、二七五	五八二	一九	八〇〇

△鑛業

樺太東西兩海岸の中央を縱走する樺太山脈中、本町管内の西部連峯地帶一圓に亘つて、無盡藏の良質なる大石炭層を有するが同地域は所謂封鎖中の炭田にして、民間への開放は許されざる爲め未だ空しく藏せられてゐる狀態であるが、是が着業の曉は、蓋し本島屈指の大炭鑛區となるは贅言を要せざる所である。

石油鑛は近時敷香支廳管内各方面に亘つて盛んに調査せられ斯業熱は著しく高まりつゝあるが、當町管内の北西端古屯地方が最も有望視せられ從來屢々各方面の調査隊が派遣せられ實調中であつたが、就中故松方正義公を岳父とする松方幸次郎氏を中心とせる財團は遂に昭和六年に至り同地方に莫大なる石油鑛區の出願許可を見たので、愈々明年より採油事業を爲すに至りつゝあるは、當町管下は云ふに及ばず本島斯業界に万丈の氣を吐くものゝみならず、蓋し大なる貢獻を齎すものと云ふべきである。

更に東方留久玉川上流に於いては多量の石灰白を藏して居る事が發見せられたが、同地方は獨り同鑛のみならず、諸種の鑛區が分布されて居るので各種の調査隊は續々派遣されつゝある。

其他當町管下各河川上流地域には、何れも多分の砂金礦があり、邦領以前露人並に先住土人が探險採取せる小屋等の遺物が諸所に散見されてゐる。

概略叙上の如くであるが、要するに管内の礦業は從來何等組織的着業を見ずして今日に至つたが、輓近漸く注目を惹き、島内外の大資本家の投資するものありて、管内諸産業中前途有望視せられてゐる。

△水　産

世界三大漁場の一たるオホツク海に面せる漁場を有し就中幌内川口附近漁場及び多來加附近の漁場は產卵の爲め河入れする鱒鮭が集合し來る爲漁獲成績良好にして本島中稀に見る優良漁場として著名なるものである。

◁…漁獲したし鱒…▷

敷香地方には鱒、鮭、鰊の漁族の外雜多の魚族が棲息し、從來一顧だにも與へられなかつた蟹は、西里耶の東樺漁業及び佐知の森本蟹罐工場の加工操業により海外へ輸出し、亦氷下魚の上海輸出等最近目ざましい進出振りを示してゐる。

今や敷香に於ける水產業は從來の如き原始的にして、併も不經濟な漁獲販賣方法を一變し加工販賣をなす事に着目し、兩三年前よりこれを實行しつゝある。

尙夏期に於ける敷香沖合即ち暖流と寒流と相合する附近には鮪、鰆、ソヒ等の魚族が居る。併し現在までには沿岸漁業にのみ執着しこれを放任して居たが、兩三年來沿岸漁業の不成績と三種の魚族の市場不振により、一般に沖合漁業に着目し南途最も囑目されて居る。

鱒、鮭は本島唯一の地位にあり、從つて其の繁殖保護にも力を致し、目下幌内川各支流に孵化場を設置する計畫を樹てゝ居るが、既に事業開始中のものは、樺太廳中央試驗所經營にかゝる保惠孵化場及敷香水產會經營の試意加及上敷香孵化場にして、昭和七年度は採卵數、五百七十三万二千五百粒に達し、極めて有益なる事業なりと謂はれて居る。

△商　工　業

(イ)商　業…本町は近時著しく發達膨脹し戶口の激增と諸般の施設と相俟つて東海岸屈指の都邑として知られ今や本島東海岸に於ける經濟的中樞の位置を占むるに至れり。

王子製紙株式會社
(敷香駐在所)

本町に於ける商業の王座を占めるものは國際河川として著名なる幌内川より移出される北洋材である。近時本島々外移出材の三分の一を占むるまでに商取引が旺盛であるのみならず其の品質に至つては斷然他地方のそれと比し、石百に對し如何なる市場氣配にあるとも三十圓の高値がある程敷香生木が有名となりつゝある。

本町一般の取引方面を觀察するに主たる取引先は小樽、函館、青森、京阪地方及羽越方面にして主として米穀、雜貨、蔬菜、農具等を移入し木材水產物を移出しつゝあるの狀態で尙管下に於ける會社は產業の發展とともに增加の傾向がある。

(ロ)工　業…本町に於ける工業は製材業を除き他に見るべきものがなかつたが近年製材事業著しく旺盛となり他地方より工場の移轉其の他の工業を企劃するもの續出するに至つてゐる。

從來敷香には釀造工業に屬すべき清酒の釀造は殆んど絕望とされてゐたが、昭和五年市內東一條北四丁目白石酒造店に於ける「幌泉」の釀造を嚆矢とし六年よりは東一條南一丁目に於て藤永酒造店が地下七百尺の井戶二本を堀り稀に見る良水を得て當町に於ける清酒釀造は極めて有望なる事業として着目せられるに至つた。

次に水產加工業にありては斯業の代表的なる中里耶に於ける東樺工場は鱒、鮭の冷凍と更に本年よりは大規模なる鱒、鮭、蟹の罐詰事業等有利なる事業とされてゐる。

教育

小學校

當町には未だ樺太公立小學校の設置よりないが、而も逐年增加する人口に伴なひ就學兒童また激增し、ために小學校の增新築を見てゐる。昭和八年度に於ては約二万圓の工費を以て敷香校、上敷香校、中敷香校の增築に着工するに至つた。

次に當町小學校情勢を見れば

校名	八年度豫算	五月末日現在 教員數	在籍兒童數
敷香小學校	一二、五〇三圓	二五	一、一三九
多來加小學校	七五五	一	三九
上敷香小學校	四、四八〇	七	三六五
大木小學校	六七七	一	二六
駒間小學校	六七四	一	二六
氣屯小學校	一、二〇五	二	七九
保惠小學校	六七一	一	四四
中敷香小學校	一、二五七	一	七三
敷香第二小學校	一、八七八	二	八一

外に初問及び氣屯二股に私立小學校あり、初等教育に力を盡してゐる。

青年訓練所、青年團

第一年次より第四年次までの生徒數三十七名あり其の成績は稍良好である。青年團は當町管下各部落毎にあつて其の數八、團員數三百四十二名、社會奉仕、體育向上精神修養に努めて居り、又敷香、上敷香、中敷香、佐知には女子青年團もあり其の使命を發揮してゐる。

帝國在鄉軍人會分會

敷香町分會役員及會員

分會長	副長	理事	監事	理長	評議員	旗手
一	二	五	三	一三	一〇	一

會員

將校同相當官	下士一七名	兵一九九名	計二二三名
顧問及名譽會員	二九名	顧問 二名	計三一名

上敷香分會

分會長	副長	理事	監事	會員
一	二	二	二	一一二

交通

文化の恩惠に浴する事の遲れた當町管内は五百廿五方里と稱される廣大なる面積を有してゐるにも拘らず、未だ一線の既設鐵道をも有たない。然し現在工事中に屬するものに敷香…上敷香間十五哩餘の北斗軌道があり亦當町を基點に池田澤迄卅三哩の東樺拓殖鐵道株式會社（資本金二百万圓）があり、更に第二期線工事により新問（當町を距る南方十一里廿五丁）迄開通を見た樺太鐵道株式會社線も人絹パルプ工場が敷香に設置されゝば直ちに當町までの開通を期待されてゐる

陸上交通

敷香運輸株式會社創立により木年は昨年から引續いて敷香市街を中心に自動車運轉を見た。

使用車は廿餘臺あり敷香…新問間二圓敷香…氣屯間五圓の料金で（冬期三割增）所要時間は大体に於て十哩一時間である冬季積雪期間に於る馬橇の旅も速い馬ならば鈴の

音を耳に布團に包まれ溫かく寢ながら愉快な旅ができる夏季間は人馬の交通を不可能とされる惡路やツンドラ地帶も容易に馬橇を走らせ文化的施設の遲れてゐるそしてツンドラと稱する特殊の地層の多い當管内の旅行は寧ろ冬季間の方が樂である。尙馴鹿橇は本地方特殊のものでもあり夏季間のツンドラ地帶旅行には頗る至便である。

海上交通

島内沿岸航路に知取、新問、泊岸、内路、敷香間を毎日運航するものと、敷香より多來加、野頃、散江、海豹島、志文頃、散頃、淺瀨、遠内に至る月三回往復の二個の受命補助航路の外に敷香…新問間には多數の船舶業者が營む貨客運輸の發動機船も就航してゐる。北海道方面との連絡には命令定期船の北日本汽船所有間宮丸（總噸數一、三〇〇噸大泊經由小樽間を月五回）と其の他の自由航路船により貨物の大量輸送が行はれて居り幌内河港の築設が實現されゝば頗る有利のものとなるは論を俟たない。

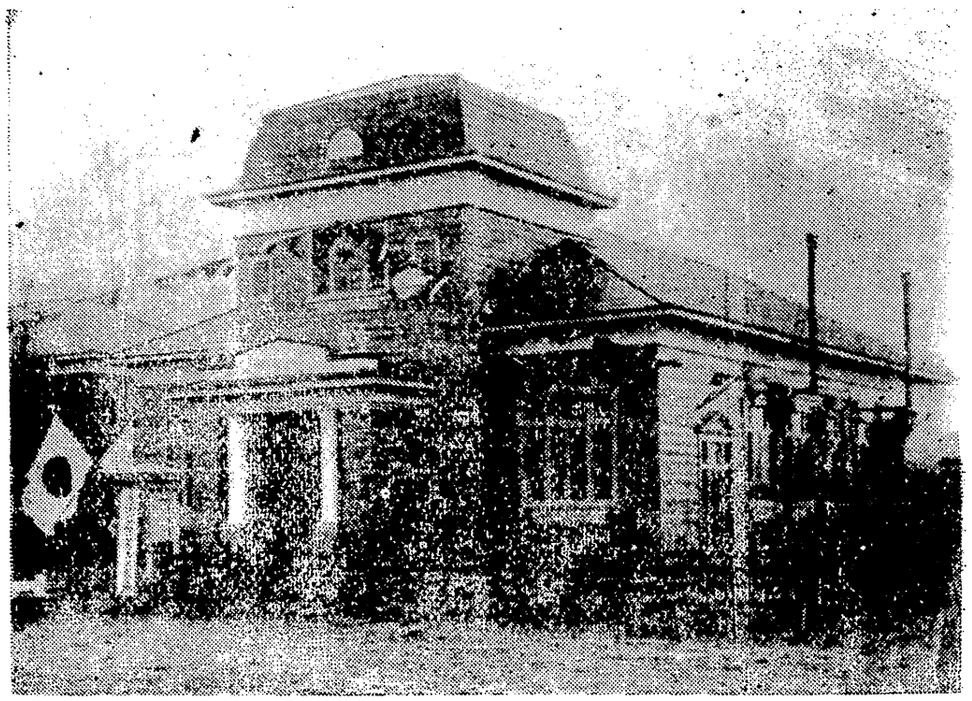
幌内の水利

緩流、大幌内川の船舶運航に就いては木材流送作業の爲め河港より約五里上流の箇所に築設された網羽のため溯航不能となり現在では河口より一里半餘東に分流してゐる多蘭川經由を餘儀なくされてゐるので頗る不便である。從つて木材業者との間に面白からぬ空氣を釀しつゝある。

飛行艇會社の百五十馬力と五十馬力との飛行艇二隻は紀州熊野川の式を採用したもので夏季間は幌内川を溯航し保惠氣屯方面の貨客輸送をなしてゐる。

管内の道路

敷香上敷香間五里廿五丁餘を敷香川の流れに沿ふた舊農耕道路は住民多年の要望容れられ昭和六年五月二日附を以つて國道に編入の上、上敷香街道と改稱された。そして失業救濟事業とし一昨年來之れが改良工事に着手して居り更に一万五千圓を投ずれば完全なる道路となると云はれて居る。併し乍ら佐知、多蘭、多來加を經て池田澤の通路に至つては實は架橋の設備さ

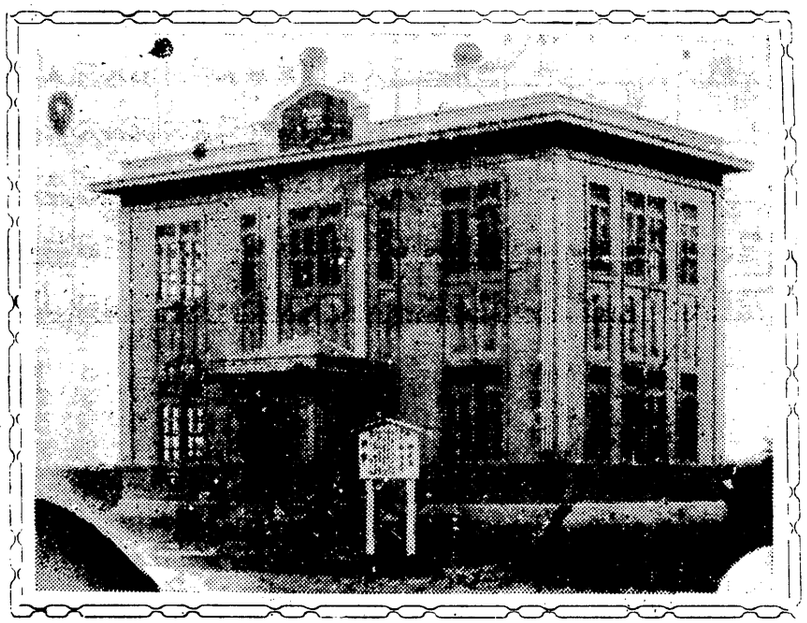


モダン建築の……

敷香公會堂

へなく有料渡船を以つて之れに充て海岸は波打際を、森林地帶は林間歩道を辿るに過ぎない。これは要するに人口密度の關係と町財政狀態とに支配されたものではあるが漸進的に改良を加へ同地方の開發を促進する必要がある。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇



◁……署務林香敷……▷

管内（關係）里程表

	敷香	幌内	網羽	敷香	中敷香	上敷香	多蘭	西來加	多來加	大木	東來加	富内	初問	二面庄	保惠	氣屯	這松	古屯
敷香		一八二	三五〇	三三一	二七九	三三五	一五二	五三三	四八三	五三三	九二三	三五七	一四三	二八三	三六四	一四三	一九四	一七〇
幌内	一八二		三三一	三四七	二七九	二七八	一七二	一七二	一七二	一七二	一七二	一七二	一七二	二七二	二七二	二七二	二七二	二七二
網羽	三五〇	三三一		二五九	二五四	二五六	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四
敷香	三三一	二七九	二五九		二七九	二七九	二七九	二七九	二七九	二七九	二七九	二七九	二七九	二七九	二七九	二七九	二七九	二七九
中敷香	二七九	二七四	二五四	二七九		二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四	二五四
上敷香	三三五	二七八	二五六	二七九	二五四		二七二	二七二	二七二	二七二	二七二	二七二	二七二	二七二	二七二	二七二	二七二	二七二
多蘭	一五二	二七九	二五九	二七九	二五四	二七二		二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇
西來加	五三三	四八三	二五三	二七九	二五四	二七二	二七〇		二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇
多來加	九二三	七三三	三五〇	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇		二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇
大木	五三三	二八三	二五三	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇	二七〇		二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇
東來加	二六三	五七四	三五〇	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇		二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇
富内	一四五	八三四	九二五	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇		二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇
初問	三五三	二七四	二五四	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇		二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇
二面庄	二六三	二七四	二五四	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇		二七〇	二七〇	二七〇	二七〇
保惠	三五三	二七四	二五四	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇		二七〇	二七〇	二七〇
氣屯	三三一	二七四	二五四	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇		二七〇	二七〇
這松	二七二	二七二	二五二	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇		二七〇
古屯	三三一	二七二	二五二	二七九	二五四	二七二	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	

敷香間…二八里三、二六
散江

敷香
内路間…五、〇一、四五

敷香
南新問間…二、二五、二三

上敷香
内路間…五、三二、一九

南新問
大泊間…六二、一九、〇〇

南新問…間三等汽車
大泊…間賃八圓

エキゾチック シカ

二七二	二七二	一五四
一四二	一四二	一五四
一九二	一九二	一五四
二五二	二五二	一五四
二六二	二六二	一五四
二三二	二三二	一五四
二五二	二五二	一五四
二八二	二八二	一五四
二四二	二四二	一五四
山鼻	半田澤	國境
池田澤		

▲土人部落

本部落は約五拾年前露領時代北樺太より移住し幌内川流域に三戸乃至六戸多きば十戸内外の集團を以て點住せり。漁業、狩獵を生業とし傍ら馴鹿の放牧をなして生活して居たが領有後樺太廳に於て土人保護の目的にて土人專用漁場管理の制を設け保護指導するに至り今日の部落を形成するに至つたものである。

(イ) 生活狀態

何れも漁業、狩獵を生業とし傍ら馴鹿を放牧し自給自足を生活の基調とするも領有以來邦人の移住增加と共に漁、狩、舊日の如くならず加ふるに内地人の環境に支配せられ消費方面著しく向上し、ために生活困窮するに至りたるも其筋の指導に依り漸次改善せられ、近時農耕に從事するの者增加するに至りたるは喜べき現象である。

就中敷香支廳の積極的なる指導のもとに中敷香の肥沃なる土地を選定し土人農場を建設し各土人に殆んど强制的に耕作從事せしめたる結果、彼等土人が冬期中寢食するとも尙餘裕ある收穫をなすものもあり土人間にも極め

で農業生活に興味を覺えしめるに至り排作期を待ちあぐむ迄に至つた。

（ロ）土人學校

土人部落には一、二の日本文の平假名を角し數字を書き得るものの外は何れも目に一丁字なく殆んど原始的民族なりしが樺太廳に於て昭和五月九月一日土人學校を設置授業を開始し目下日本學童同樣の尋常一年同等の教育を施し居れるが記憶力相當にして勉强も亦熱心、特に唄歌の如きは音聲鮮にして驚嘆する許りなりと云ふ。

（八）人口、戸數

（イ）オロッコ族　五三戸（男一四四人　女一二四人）

（ロ）ギリヤーク　二七戸（男六六人　女五〇人）

（ハ）キーリン　三戸（男一二人　女一〇人）

（ニ）サンダ　二戸（男五人　女五人）

（ホ）ヤクーツ　一戸（男一人　女一人）

計　八六戸（男二二八人　女一九〇人）

（ニ）土人の特種自治

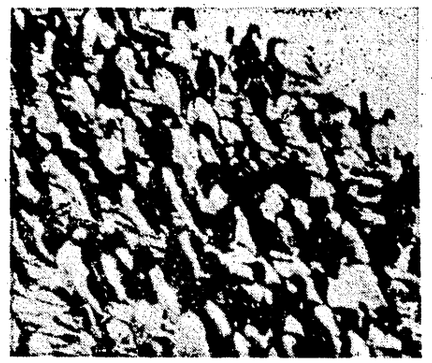
敷香支廳には土人係が導いて直接指導監督をなしつゝあるが土人には法律適用されて居らぬために万一所謂犯罪行爲がある場合は土人從來の舊慣に依り制裁する事になつて居たが近時此の舊慣に依る制裁も万事敷香支廳土人係の決定に依り制裁をなしつゝある。

▲國境碑

露名を「チフメネフ」或ひは「テルペーエフスキ」と稱んでゐたが、邦名ではシスカと云つてゐた。そのシスカの語源については判然した何等の考古はないけれど既に露領時代から漁業に來てゐたといふ古老の談によると艇々七十餘里を流れてゐても未だ一回の氾濫もなかつた國際河川幌内川…その流れは悠久無限而も常に滿々とした河水は波さへたゝず靜河そのものであつた。靜河…その靜河がシスカともじれ、それが語源となつたらしい。だから當時幌内川にもやつてゐた漁船などにも「靜河第

何號」と書かれてあつた。

シスカが現在の呼稱であるシクカとなつたのは先年樺太廳が全島の町村名を其の字義通と發音を改正した事によつて改められたものである。敷香町はその面積五百廿五方里の廣さを有して居る。而も此の香川縣以上の面積をもつてゐる敷香町は、赤露との國境にある明治卅七、八年日露戰爭の結果樺太が我領土となつた際北緯五十度を劃し國境劃定委員の手によつて國境碑を建てた。國境碑は花崗石で縱二尺、横一尺五寸ほどのもので邦領に面した部分には菊を、露領に面した方には双頭の鷲を何れも國紋を刻み、その外柵を二間四方ほど廻らしてある。視察者は紋面に草汁を或ひは墨汁を塗布し



……鳥ンペツロの上岩……
（海豹島風景）

ハンカチ又は紙に是を押刷して國境視察の記念にする者が多い。

敷香町市街より約廿七里で、冬は馬橇で四日、夏は自動車で一日（何れも往復）此の國境視察ができる。亦、冬季は此の國境半田に於て毎週木曜日に、國境警備隊（半田警部補派出所）立會の下に日露間の國際郵便交換が行はれる。

▲白鯨と鮭鱒

十二月頃から結氷したオホーツク海も、四月になるとザザザザツ、ザザツと音をたてゝ丈餘もあらうと思ふ厚氷は割れる。割れた氷は一塊の氷山となつて時として戯むれ遊ぶアザラシの幾匹かを乘せ沖へ…それから暖流の流れる宗谷海峽へと溶けて行く。

それを待ち兼ねてたやうな鯨の大群は、種族の增殖を圖らんものと沿岸近くへドツと押寄せ、時としては海水を灰白色に變じさせ放卵する。その鯨を亦は小魚を餌食にせんと追つて來るのが白鯨である。

白鯨は、体長三間内外のもので、追ひ込んだ小魚を食

はんと川口に立つ浪を乘切りて幌内川へと泳ぎ入る。白い背を現はし、水をふき、そしては潜る百頭にも餘る白鯨の泳ぎ廻るさまを目近く見る事のできるのは、敷香だけの觀物であらう。

けれど此の白鯨は、現在敷香で捕獲してみても生產價値は大してない。肉はまづい。魚油加工の工場でも出來ない限りは珍らしいと云ふ以外になにものもない。それだけ敷香には餘裕があるのかも知れぬ。

一望漂渺とした青海原も六月も半ばを過ぎ、やがて七月となれば流石オホツクの海も紺碧にはれて、見るからに魚族の豐富さを其の深い海の色から想像できる。

ピチ〳〵とした鱒が、定置漁場の建網に、專用漁場の建網に、或ひは脅え乍らも生きんがためにはやむなく密漁の罪を犯す粗末な曳網にも、その跳れ上る潑溂さを見ることができる。

鱒の回游も薄くなりトキシラズがとれる頃を少し過ぎると鮭の大群が後から後からと押寄せてくる。

殊に曾ては產れ出でた喜悅を記憶してゐる幌内川へ溯上する鱒鮭は、上流の小河にまで我れがちと溯り、背ヒレまで白く光らして產卵して居るのを見ても、その數無盡藏である事を立證できやう。

尙この鱒鮭の盛漁の頃は、鱒三錢、鮭廿錢、そこ〳〵（何れも生賣一尾）が相場である。土人保護の立場にある敷香支廳では、何人にも禁漁としてゐる幌内川口附近に土人を使役し網を建て年收五千圓程度の漁獲をして是を土人の生活安定費に充當する。だから密漁によつて食はんとする者は、秘かに土人に變裝し漁獲するなどもあり笑ひぬ人生の喜劇を見ることもある。

▲土人の住居

樺太に住むアイヌ以外の土人は大概敷香に住んでゐるそれは敷香支廳が土人保護係りを置いて彼等土人の生活を或程度まで保護してゐるためもあらうが、其の反に面は彼等の生活する上に敷香が適地であるからで、即ち常食物とも云ふべき鮭鱒の漁獲、狩獵による獲物などの豐富な點、殊に彼等の乘用物であり搬出に使用する馴鹿の

唯一餌料であるツンドラが容易に隨所で得られる事にも敷香を以て彼等の樂園地としてゐる所以であらう。

敷香支廳土人係りの調査による昭和八年春の管内土人は

△オロツコ、男一四四、女一二四△ニクブン男六六、女五〇△キーリン男一二、女一〇△サンダ男五、女五△ヤクーツ男一、女一

計四百八十一名居る。併し是等の土人は、冬は狩獵のために山中深く移動生活をして居るので、彼等の集團部落である敷香の對岸オタスの森には幾何も殘り住んで居ない。けれど夏の鮭鱒漁期になると、是等移動してゐた土人の大多數はオタスの部落へ、又は幌内川畔に出て來て住家をつくる。

夏の住家は、日光の直射を避けるためと又冬の食糧とする鮭鱒の燻製を河畔で拵へるため丸太の堀建である。その屋根と周圍は椴松か蝦夷松の樹皮で圍ふ。方形で、建上は六尺位が多く、廣さは五坪乃至八坪ぐらひ、漸く出入し得る程度の入口を前面の中央につくり、それへ獸の皮又は木綿數枚を重れたアツシやうのもを上から垂れて扉とする。内部の土間には松葉或ひは乾草を敷詰更めにムシロか薄綿を敷いて起臥する。

冬の住家は、密林の中にテントでつくる。細丸太を圓錘形に組立て帆木綿で拵へた天幕を覆掛け、中の廣さの八坪から十五坪位のものもある。入口や土間などは夏は住家と稍同じだが、たゞ豐かな者は獸皮（主に馴鹿の皮）を敷いて防寒してゐる。同一家族も若い夫婦などは住家の内部を更に仕切つて睦しく住んでゐる。

▲倉庫と獨木舟

冬は山に狩し、夏は海岸又は河邊に移動生活をする彼等土人は海岸、河邊には倉庫をつくつて冬の食糧を貯藏して置く。倉庫の廣さは三坪ぐらゐなもので椽下を三尺ほども高くした上に幅八寸そこ〳〵の板を下方に弓なりの曲つたものを四本の地杭に乘せその上から丸太又は厚板を敷き周圍も同樣に丸太か厚板で張る。屋根は白樺の厚皮の上に小枝などを積んで雨雪を防ぐ。何故に地杭を

高くしその上に弓なりの板を置くかと云ふに、それは鼠を防ぐ爲の設備である、地杭を登つて來た野鼠は、此の弓なりになつた板の爲に遮ぎられて其處から上の倉庫の中へは登れない仕掛けで、無智な土人にもそれ相當の智慧がある。

倉庫には、彼等の常食とする鱒、鮭、鰊の乾したもの又はアザラシ、馴鹿その他の獸類の毛皮や乾、鹽、炊焚燒肉などを夏のうちから貯藏して置く。夏の食料は、生魚のまゝ切身にし、或は千切つて鹽をつけてムシャ〳〵喰べる。鮭の頭の眞ッ赤なやつを兩手につかみ頰張つてゐる子供などを河岸でよく受見ける事がよる。

獨木船は、直徑三尺もあらうと云ふバッコ柳　ドロ柳を長さ五間內外に伐り無細工な斧と鋭利なマキリだけで約三年を費して拵へる。なぜ三年もかゝるかと云ふに伐つた年はそのまゝ乾燥させる。二年目から削り初めるが一氣にやると割れる虞があるので氣長に併し彼等獨特の腕を揮つて造り上げる。舟は輕快で百貫の積載量は充分にある幅が狹いので轉覆の危險率が多いが操縱に巧みな土人は數人立ち上つて競漕もやり其の快速は隅田川のボートレースとは違つた野趣タップリの面白さがある。

▲土人の婚姻、出産

男は廿三歳ぐらひ、女は十九歳ぐらひになるとソロソロ結婚する。結婚には兩親の理解が可成りある。先つ本人同志の意志を尊重した上で親が承諾し、そして結婚が成立つ。獨立意志の表示ができぬ少年少女なれば兩親の意志を基礎とする。順序は、媒介者が双方の意見を纏め嫁をめとるには里方に結納として寶物或ひは馴鹿を贈る貧しい者なれば或る期間だけ嫁の里で勞働して結納品に代るを例としてゐる。

嫁の里が豊であれば、嫁入にあたり適當の財産を持たしてやる。結婚後に於て家庭の不和から離婚になるやうな場合の制裁もあるが、それは事情によつ異るから省略する。結婚する間もなく姙娠となる、日滿ちてくるに從つて産所を造られねばならない。そこで亭主は山へ行つて丸太を伐り樹の枝を集め枯草の拾つたもので堀立小屋を

造る。それが産所で、姙婦はそこへ別居する。老婆が一人ぐらひ付添て何くれとなく姙婦の世話をし乍ら出産を待つ。出産の刹那も多少の苦痛は訴へるが別に大騒ぎもせずに生みおとす。生れた赤ん坊には普通人のやうに産湯なぞつかはせない。大部分を布で拭き、別な布に包み子釣り板といふのに仰むけにしばりつけて居る。

産婦といふと是も大して人手を借りやうともせず、分娩後二三日もすると床から離れ、もう常のやうに働く。

子釣り板といふのは長さ二尺ぐらひ、幅一尺ほどの楕圓形にした木の皮又は木をえぐつて背あたりの良いやうに凹みをつくつた模型獨木船のやうなもので一番凹んだ處に穴を堀つてそこから小便の落ちるやうにしてある。

子供に乳を呑ませるには、子釣り板のまゝ抱いて與へる。そのほかの時は糸で子釣り板を梁或ひは枝に吊し泣けばそれを搖する。おむつはサローガゼ（松葉が虫害で乾苔のやうになつたもの）かツンドラの柔かく乾燥したものを用ひる。

▲死亡と其の後

土人の日常生活には、其起居、進退、應接の態度、およそ禮儀や作法の觀念は頗る稀薄である。言葉なども、目上への敬語、目下に對する區別は、殆んど無いといつてもよい位。此點彼等は階級打破なぞと血眼になつて騒ぎ走らなくともよい。

けれど死亡した時には、悲しみの情には變りはないやうである。男が死んだ時は四日間、女なれば五日間、親類眷族が相集り嘆き悲しみ通夜をして棺におさめる。死者のために、男子は棺をつくり女子は新しい衣類（死者の着る）を縫ふ。此の死出の晴着は吾々の佛葬の際と稍似てゐる。それから生前に死者が愛玩した種々の器物、たとへば……弓、矢、マキリ、ストー（スキーと類似の雪走具）食器などで、是も墓前に供へる。併し、供へた是等の器物は何れも壞はす、滿足なものであると盜んで行くからである。

冬、狩の途中に死去した場合は、土葬も火葬も困難なために荒削りの板で細長く寢棺をつくり、三尺乃至五尺

ほどの高さの木の上に置いたまゝ移動して行く、雪が消え夏が過ぎ秋が來る頃になると、寢棺の中の死體は肉が腐爛し骸骨となつて了ふ、是を俗に天葬と云ふ。だが普通の場合はオロツコは土葬、ギリヤークハ火葬とする。

文字の殆んど無い土人の社會には、墓標に戒名を書く器用な眞似はできない。だから墓によつて何處の死者であるかを判明するには墓標の細工によつて是を知るのである。蜜蜂の箱のやうな此墓はちよつと見れば同じやうに見えるが、よく熟視すると夫々異つた處がある。形の大小、板の木目の色々、棟木の細工の違つた點など、みな一樣のものはない。

尙此の以外にも火葬の墓、土葬の墓もあり亦墓標も十字架やうのものもあるが、何れも大同小異であるから省く。

▲土人の神樣

土人は、迷信に囚はれる事が可成り强い。不幸や凶事に遭ふと直ぐ祈禱をしてその退散を祈願する。祈禱をするには土人中に常に祈禱をする者に賴む。頭痛、腹痛四肢の痛みなどは、その痛む部分を暗紫色になるまで捻る或ひは頭部がいためば咽喉、腹がいたむ時は腹に、椴松の落葉又は黑百合の根を口に嚙み碎いて夫を患部にあてゝ治療する。藥草は彼等の間にも可成り多くあり主に女が知つて居つて家傳としてゐる。

藥草で治らぬ重症となつた時にシャマンと稱する不思議の祈禱をする。先づ祈禱人が來ると神樣をつくる。

長さ六寸ぐらゐの木で男体と女体との二つを削つてこしらへ、是れを布で包み更に木の薄皮で下寧に包む。納豆の苞のやうなもので、それを病人の上から吊る。病人の前には火を焚く。祈禱人はアラーセ（帽子の類を）かむり、數々の金具のついた帶をつけ、馴鹿の皮でつくつた太鼓を左りに右に撥を持ち交へ乍ら、口の中で低く呪文を唱へ、靜かにトントンと太鼓を叩き身振りをする。それに和して腰につけた金具はチャリン〳〵、調子が高潮するにつれて、段々と奇聲を上げ呪文を叫び、焚火を口で嚙み果ては是れを喰ひ太鼓を亂打する。暫らく狂氣

のやうに斯うしてゐるうるに病人諸共身心綿の如くクタ〳〵に疲れ昏倒してしまふ。此のジャズ的祈禱が、彼等の間には不思議なほど百パーセントの奇効を奏する。病氣は、身心の汚れから原因してゐるのでその罪劫消滅のため詫びるのであると、此の氣狂ひじみた祈禱を云つてゐる。

行方不明の者の安否を氣遣ふ場合も、前のやうな神樣をつくりいのりを捧げる。

一度つくつた神樣は、その後は家の隅の方に吊し永久に其の家の神に祭る。また祈禱者へは、謝禮として帛布を贈るのを例とする。此の神樣はマキリ一挺でつくるのである。

▲海豹島と夏の海

精力强大といへばオットセイを想ひ、オットセイを想ひば海豹島を考へる。その海豹島は、敷香より八十海里の南東にある長さ三百間、幅六十間、海拔僅かに五十尺の一岩礁にすぎない。

明治三十八年樺太領有當時は約二千頭の上陸棲息よりなかつたが、卅九年からは毎年樺太廳で監視員を派遣し五月末より十月まで駐在させ、一意增殖と保護に努力した。めか最近の上陸は四万頭におよび、年々の生兒も一万頭をくだらない。

明治四十四年に日、英、米、露との國際條約締結によつて條約國はそれ〴〵捕獲撲殺數を定めて居るが、海豹島は本年は二千頭撲殺の豫定で是を累計すれば約二万五千頭の撲殺をしてゐる

◇……オットセイのムレーパ（海豹島）……◇

太平洋沿岸から日本海附近を北上してきたオットセイは、五月の半ばに海豹島に上陸する、その順序は何れも元氣旺盛なる牡獸が先着し牝獸の產褥に且は分娩後の交尾に好適なる場所(砂濱)を殆んど不眠不休で撰擇し、斯くて選んだ場所に固着し牝獸の來るのを今や遲しと待期する、それから約廿日遲れて徐々に牝は上陸してくる、だがその上陸せんとするにあたり素早く强大な牡のところに飛込まぬとウロ〳〵してゐるうちに四方から牡が押かけ引つ張られ無慘八ツ裂になつて非業の横死をとげればならぬ

强大な牡獸は四十頭から多きは百頭の牝獸をその精力下に擁し、分娩後はこゝにいとも樂しげなハーレムを營む、併し敗れた弱い牡は波打際に咆哮しつゝ牝を奪取する隙がなと虎視眈々としてゐる、牝は六月より七月にかけ一頭の仔獸を分娩し數日にして交尾受胎、十一月には仔兒と牡と共に退島する

オットセイ上陸と前後してロッペン鳥も海豹島に飛來する、ロッペン鳥はオットセイ分娩にあたり卵膜(エナ)をくちはしで破り仔兒を出しエナを喰ふ、即ち助產婦の役をする、體は家鴨ほどあり上面は灰黑色、翼の中央及び胴以下は純白である、六月初めハーレムの上の岩石の凹部をえらび一個產卵する、落下したり又は奪られると亦一個產卵し決して二個は生まない、卵は淡青黃に灰色の斑紋あり、鷄卵の二倍はある

◆…

七月の半ばから八月下旬にかけての敷香の海濱は、濱茄子が眞ッ赤に咲き亂れる砂濱のあたり、海は遠淺、八十度の暑夏は樺太とは思はれぬ「海の誘惑」を感ぜずにはゐられぬ

交通の至便に俟ち、こゝに海水浴場の設備をするならば冬季に於ける幌內川のスケートリンクと共に、全島第一の健康的遊樂の地とならう、尙こゝから五里、內路村に通ずる砂道を自動車ドライブの快さは世界一の稱あながち誇大宣傳でないことを信ずる。

昭和八年七月五日印刷
昭和八年七月十日發行
發行所　敷香町役場
敷香町大通北二丁目
印刷所　樺太印刷社
電話二五八番